

NOと 言える 英語力

Developing English Skills To Speak Up

●東洋大学教授

浦田 誠親



Developing English Skills
To Speak Up

NOと 言える 英語力

buchika Urata
渾田誠親

江苏工业学院图书馆
藏书章

浦田誠親（うらた のぶちか）

1929年生まれ。一橋大学社会学部卒業。時事通信社入社。ボン、アフリカ、ロンドン、ハンブルク、ロンドン（再）の特派員、ニューヨーク総局長など歴任。1985年時事通信社退社。現在、東洋大学文学部教授。訳書にJ・ダッフィ「ポルトガルのアフリカ支配」E・グレス「ドイツ統一か分割か」ウォルター・ラカー「ドイツ人」J・ルブニク「中央ヨーロッパを求めて」などがある。

NOと言える英語力

1990年11月22日 第1刷発行

著者——浦田誠親

定価——1400円（本体1359円）

©Nobuchika Urata 1990 Printed in Japan



発行者——野間佐和子

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21 郵便番号112-01

☎ 東京 03-945-1111（大代表）

装幀——藤村 誠

印刷所——慶昌堂印刷株式会社

製本所——株式会社大進堂

●落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは学芸第二出版部あてにお願いいたします。

ISBN4-06-205119-2（学2）

NO
と
言
え
る
英
語
力
◎
目
次

一章 度胸で英語はうまくならない

外国語を「きく」ことの大切さ 11

“コックニー”は英語の名家？ 13

女王陛下もコックニーがお好き 17

新鮮な聴解力を持つ子供たち 19

「ながら族」で語学の習得 24

聞く能力と話す能力 27

外国語を習得するコツ 29

二章 英語を話さない英語教授

他人の失敗を笑いものにする日本人 32

今もある英語教育の弊害 35

英語の発音が上達するには 39

正しい英語の発音は子音から 42

文法が先か、発音が先か 45

三章 通ずる英会話をどう習得するか

英会話学校は大はやりだが 50

どうしたら英語力がつくか 54

英会話習得後が問題だ 57

中身が問われる英会話 60

表現力と内容が英語上達のカギ 63

英語の運用能力は時代の要請 65

四章 話し方の技術

正しい発音習得への熱意 69

「沈黙は金」ではない 73

日本語の話し方が先決だ 78

話すことを重視してきた欧米社会 81

「発音練習は風呂でやりなさい」 84

五章 私の実践経験

日帰り旅行で外国語が学べる 88

「外人ハンティング」の功罪 90

実践の場と能力の豊かさ 92

母国語を忘れた大統領 96

失敗、冷や汗の中に感動がある 100

六章 日本語が邪魔する日本人の英語

日本人らしく振る舞うとは 105

英語をしゃべって頭を切られる 108

日本語の壁を打ち破ろう 112

外国語の表現に慣れよ

115

日本語の概念を持ち込むな

119

七章 少ない語彙で表現力を豊かに

英語が通じないボンの下宿

123

語彙はどれほど必要か

125

「八百五十語だけで英会話習得」

129

ベーシック・イングリッシュの活用方法

131

辞書に頼らず表現力をつける

133

ベーシック精神を生かそう

137

八章 背景知識を利用した語学学習法

自分の耳の悪さに愛想が尽きる

142

グリム童話のレコードで勉強

145

背景知識を利用しての聞きとり

149

英字新聞を読める力に

154

九章 日本人はなぜ英語がうまくならないか

英語教育大論争

159

ユニークな日本の英語教育論

162

アメリカの研究者も話すのは苦手

166

通用しなかったドイツ語知識

170

多様化している語学能力

173

十章 これでいいのか、教える側

教室と教え方の改革を

178

小人数クラスがなぜよいのか

181

小クラス編成への私案

184

教師の英語能力を高めよ 188

見直そう、大学の語学教育 191

十一章 語学が「できる」とはどういうことか

「君たちの英語はだめだ」 195

「別冊宝島」の批判は当たっていない 198

「正しい英語」とは何か 201

英語の「できる」人は本当にいるか 204

企業は英語の「できる」人材を求めている 208

十二章 日本人の英語力を国際比較する

信頼性高いTOEFL 213

日本人の英語力は下位 216

コミュニケーションの能力を測るTOEIC 219

大学卒の英語力はどの程度か 223

十三章 止めようもない英語時代だ

アメリカは多言語国家？ 227

世界五十五カ国に影響及ぼす英語 231

国際会議は、今や英語が主力 235

誇り高きフランスにも英語人気 239

英語は世界の若者の言葉 242

十四章 しよせん他人の言葉、気楽に使ってみよう

ゲール語を死守するケルト系民族 246

英語に振り回されるのは御免だ 250

本物と違った英語を使っても平気 254

中国式英語習得法 256

“long time no see” 258

十五章 国際人のマナー

身勝手な和魂洋才主義 262

外国の生活習慣も学べ 266

求められる国際人としてのマナー 271

国際社会から孤立しない態度 275

英語の力を通して心と心の触れ合いを 279

参考文献

あとがき 292

一章 度胸で英語はうまくならない

外国語を「きく」ことの大切さ

会話やコミュニケーションは、野球のキャッチボールによく似ている。ボールをきちんと捕球できない者は、投げられたボールをいつもパスしたり落球したりして、投げることに手間取ってしまう。キャッチボールはリズムを欠いてがたがたになり、やっても面白くないに違いない。

会話の場合も、相手のいつていることをまずきちんと理解することが欠かせない。聴解力が低いとか、よく訓練されていないと、会話はリズムに欠け、一方的になり、続けても苦痛が多く、楽しみは少ないから長続きしない。

外国語で会話をスムーズにやれる人間になりたいと思ったら、まず取り掛かるべきは、捕球に相当する耳の訓練ではないかと思っている。

私は、敗戦後その年月もたっていない一九四九年にアメリカ人の友人ができて、英語を話す機会を初めて得た。そのとき、相手のアメリカ人は、

「英語を聞くのはやさしいだろうが、話す方は大変だろうね」

と私に問いかけた。

本人にとっては、母国語だから聞くのは何でもなく、そういったのだろうが、英語で話す初めての体験をした私は、英語の音声に全く慣れていなかったから、最大の困難は聞くことだった。そのように答えるとそのアメリカ人は不思議そうな顔をしていた。

しかし、それから四十年以上が経過し、その間、外国に何度も住み、旅行し、外国語を話す多くの機会を得たが、今なお自分の聴解力の貧しさを嘆いており、聴解力がもつとあったら自分の語学力はずっとましになっていただであらうに思っている。

とりあえず「聞く」と書いたが、「聴く」という言葉もある。本当のところはどっちなのであろうか。英語では hear と listen to が区別されていることは、周知のとおりである。

前者はもともと、人の声やその他の音声が自然に聞こえてくるのを耳にしている状態である。後者は何かの音声を努力して聞く、あるいは人が話しているのを注意して聞く行為である。hear は広義に listen to の意味も包含しているが、本来の語義からして、hear は「聞く」と、listen to は「聴く」と訳しておくのが適切ではないかと思われる。

ここでは外国語の訓練で、「きく」ことの重要性を強調したいのだが、それは果たして「聞く」ことなのか、「聴く」ことなのか、私なりにその答えを出したい。しかし、とりあえず結論は後回しにして先に進みたい。

“コックニー”は英語の老家？

チェルシーのキングズロードといえば素敵な響きを持っている。今はパンク族ですっかり有名になったが、以前からしやれた、ちよつとロンドンらしくない明るい感じのパブや喫茶店、服飾店が軒を並べていた。

一九六三年、私がロンドンに初めて住んだときのフラットは何の変哲もなく昼でさえ薄暗いようなところだったが、チェルシーにあり、キングズロードに近いことだけが他人に話せる我慢であった。

引継ぎを終えた前任者は帰国し、ひとりぼっちになって、いよいよ私自身の生活が始まった。ある夕、ドアをノックする者があり、開けてみるとイギリス人の若い男が一人立っていた。そして彼はしやべり始めた。私には彼のいつていることがさっぱり分からない。何かお金の請求をしているらしい、とは辛うじて理解したのだが、その男が同じことを何度繰り返して

も肝心な点が聴きとれない。

私はあきらめて、

「君のことは分からない、あすの晩おやじさんに来てもらいたい」

という渡してドアを閉めた。

その青年は、極端なコックニーでしゃべったのである。コックニーというのはロンドン下町なまりの英語を指す。旧市内にあるボウ・チャーチの鐘の音が聞こえるごく狭い地域内に生まれ育った者のことも、ちゃきちゃきのロンドンっ子という意味でコックニーと呼ぶ。

当時、私の勤めていた会社の支局はロイター通信本社の建物内にあった。

ある雨の早朝、私はそのビルのエレベーターに一人のイギリス人と乗り合わせた。たった二人きりのエレベーターの中で、彼は濡れた傘をたたみながら「ライニング」という言葉をしきりに私に向かって使うのである。私はそんな英単語を知らないから、あいづちも打てずにバツの悪い思いをしていた。すると彼は片手を広げて、上から何か降ってくるしぐさをしきりにした。

いやはや彼は raining といっていたのである。彼もまたコックニー。彼らの発音だと、「エイ」は「アイ」になる。したがって、「レイニング」でなく「ライニング」となる。news-paper は「ニュースパイパー」となってしまふ。change はチェインジでなく、チャインジと